

# 詳細目次

## はじめに 6

## 第 I 部 タータンの歴史 8

### タータンの起源 10

|                 |    |           |    |
|-----------------|----|-----------|----|
| タータンの起源         | 12 | スコットランドの姓 | 24 |
| タータンとはなにか       | 14 | 氏族制度      | 26 |
| 初期のタータンの衣類      | 16 | クランの性質    | 28 |
| 伝統的な織り仕事        | 18 | 海外からの影響   | 30 |
| 初期のディストリクト・タータン | 20 | 独立戦争      | 32 |
| ケルトの影響          | 22 |           |    |

### タータンの弾圧 34

|                  |    |             |    |
|------------------|----|-------------|----|
| 不協和拡大の原因         | 36 | ジャコバイトのロマンス | 46 |
| スチュアート王家の終焉      | 38 | カロードンの戦いの後  | 48 |
| 合同法              | 40 | スコットランド人の移住 | 50 |
| 1715 年の反乱の余波     | 42 | 18 世紀の移住    | 52 |
| 1745 年のジャコバイトの反乱 | 44 |             |    |

### タータンの復活 54

|                    |    |               |    |
|--------------------|----|---------------|----|
| 禁止令の撤回             | 56 | タータンの熱狂的流行    | 68 |
| ハイランドに対する新たなイメージ   | 58 | 初期の歴史研究       | 70 |
| ハイランドの社会           | 60 | タータンの捏造       | 72 |
| ジョージ 4 世のスコットランド訪問 | 62 | ヴィクトリア女王のお墨つき | 74 |
| サー・ウォルター・スコット      | 64 | 芸術におけるタータン    | 76 |
| コスチュームとしてのタータン     | 66 | 大量移住          | 78 |

### <sup>レジメンタル</sup>連隊のタータン 80

|                              |    |            |    |
|------------------------------|----|------------|----|
| 初期の軍隊のタータン                   | 82 | 連隊を支えた織物業者 | 90 |
| ブラック・ウォッチ                    | 84 | ハイランドの軍服   | 92 |
| ハイランド連隊                      | 86 | 軍隊のバグパイプ   | 94 |
| <sup>フェンシブル・レジメント</sup> 国防連隊 | 88 |            |    |

### <sup>モダン</sup>現代のタータン 96

|                    |     |                |     |
|--------------------|-----|----------------|-----|
| キルト協会とスコットランド紋章院長官 | 98  | コーポレート・タータン    | 114 |
| クランの協会             | 100 | 各種機関や慈善団体のタータン | 116 |
| ハイランド・ドレスの装身具      | 102 | スポーツ関連のタータン    | 118 |
| ディストリクト・タータンの発展    | 104 | ハイランド・ゲームズ     | 120 |
| アメリカ大陸とのつながり       | 106 | スコティッシュ・ダンス    | 122 |
| アメリカとカナダのタータン      | 108 | 東アジアの熱狂        | 124 |
| タータンに対する新たなアプローチ   | 110 | タータンの未来        | 126 |
| 記念タータンとノヴェルティ・タータン | 112 |                |     |

第Ⅱ部 タータン名鑑 128

代表的なクラン 130

|                  |     |                   |     |
|------------------|-----|-------------------|-----|
| ブルース(BRUCE)      | 132 | ケネディ(KENNEDY)     | 154 |
| キャメロン(CAMERON)   | 134 | マクドナルド(MACDONALD) | 156 |
| キャンベル(CAMPBELL)  | 136 | マクドネル(MACDONELL)  | 158 |
| チャットン(CHATTAN)   | 138 | マグレガー(MACGREGOR)  | 160 |
| ダグラス(DOUGLAS)    | 140 | マッケンジー(MACKENZIE) | 162 |
| ファーガソン(FERGUSON) | 142 | マクラウド(MACLEOD)    | 164 |
| フォーブス(FORBES)    | 144 | マリー(MURRAY)       | 166 |
| フレイザー(FRASER)    | 146 | ロバートソン(ROBERTSON) | 168 |
| ゴードン(GORDON)     | 148 | スコット(SCOTT)       | 170 |
| グラハム(GRAHAM)     | 150 | スチュアート(STEWART)   | 172 |
| グラント(GRANT)      | 152 |                   |     |

主な一族・クラン 174

|                  |     |                      |     |
|------------------|-----|----------------------|-----|
| アバクロンピー～アーバスノット  | 176 | マクファーディン～マクハーディ      | 206 |
| アームストロング～ボースウィック | 178 | マキーアン～マツカイ           | 208 |
| ボウイ～バーネット        | 180 | マッケラー～マクラクラン         | 210 |
| バーンズ～クラーク        | 182 | マクレーン・オブ・ロツホブイ～マクミラン | 212 |
| コクラン～クローフォード     | 184 | マクナブ～マクファーソン         | 214 |
| カミン～ダンバー         | 186 | マクオーリー～マックトマス        | 216 |
| ダンカン～アースキン       | 188 | マクワーター～マクスウェル        | 218 |
| ファーカーソン～ガウ       | 190 | メルヴィル～モンクリーフ         | 220 |
| ガン～ヘイ            | 192 | モンゴメリー～ネイピア          | 222 |
| ヘンダーソン～イネス       | 194 | ネズビット～ラムジー           | 224 |
| アーヴィン～キルガー       | 196 | ランキン～ラッセル            | 226 |
| キンケイド～レノックス      | 198 | リヴェン～シンクレア           | 228 |
| レズリー～ラムスデン       | 200 | スキーン～テイラー            | 230 |
| マカリストター～マクベス     | 202 | アーカート～ウォザースプーン       | 232 |
| マツカラム～マキューエン     | 204 |                      |     |

現代のタータン・世界のタータン 234

|  |     |  |     |
|--|-----|--|-----|
| 〈アメリカン・バイセンテニアル〉～<br>〈コーニッシュ・フラッグ〉     | 236 | 〈ニューハンプシャー〉～<br>〈オーダー・オブ・ザ・ホーリー・セパルカー〉 | 244 |
| 〈ダイアナ・プリンセス・メモリアル〉～<br>〈フランコニアン〉       | 238 | 〈オタゴ・ペニンシュラ〉～<br>〈ソルトレイクシティ〉           | 246 |
| 〈フレデリクトン〉～<br>〈アイリッシュ・ナショナル〉           | 240 | 〈スコットランド2000〉～<br>〈テキサス・ブルーボンネット〉      | 248 |
| 〈葛飾スコティッシュカントリーダンサーズ〉～<br>〈ニューファンドランド〉 | 242 | 〈アルスター〉～〈ユーコン〉                         | 250 |

訳者あとがき 252

タータン索引 256

事項索引 258

謝辞 267

## はじめに

タータンはスコットランドの人々と文化の象徴である、と世界じゅうの人が認識している。それは色彩や魅力にあふれているだけでなく、風に翻るキルト<sup>[1]</sup>やバグパイブの甲高い音色、権利を求めて戦う勇敢なハイランド人<sup>ハイランド</sup>など、ロマンティックなイメージを次々に喚起させるのだ。

タータンの歴史はこうした期待を裏切らない。何世紀にもわたりその運命は盛衰し、「ズボンが買えないほど貧しい野蛮人の服だ」と嘲られたり、「危険な反逆者どもの制服である」として禁じられたりした。しかしついにタータンは苦難に打ち勝った。生粋のスコットランド人だけでなく、世界じゅうに暮らす子孫にとって、それは名誉のしるしとなったのである。

### ケルトのルーツとハイランドの文化

ハイランド——スコットランド北部の高地地方——に古くから住むケルト人は、織工として高く評価されていた。彼らは氏族制度<sup>クラン</sup>の発展に大きく貢献し、それはのちにタータンの着用と密接に関係するようになる。

スコットランドは14世紀の初頭に独立を勝ち取ったが、国内にはまだ分断が残っていた。ローランド——スコットランド南部の低地地方——はイングランドの事情にますます巻き込まれていく一方で、北部のハイランドは隔絶されたままだったのだ。ハイランドはゲール語圏で、信仰する

▼スコットランドで最もロマンあふれるヒーロー、ボニー・プリンス・チャーリー<sup>[2]</sup>。



▲タータンは大量に生産されており、その多様性は無限である。

宗教も政治的見解も経済活動もローランドとは異なっており、またはるかに貧しかった。純粋に物理的な面からみても、気候は厳しく、土地は険しく、人や物資の輸送路はなきに等しかったため、恐れ知らず<sup>けがい</sup>のよほどの強者以外は、誰もあえて行こうと思わない化外の地<sup>ドレス</sup>だったのである。

この隔絶は、ハイランド衣装とタータンの保全には役立ったが、同時に、離反の感情を高めた。スチュアート家が王位を継承していたときはこのような感情は抑え込まれていたが、ジェームズ7世が王座を追われると、多くのクランが疎外感を深めていったのだ。グレンコーの虐殺(1692年)や合邦(1707年)などを通して、スコットランドは自国の議会も独立も失うこととなり、ハイランドの多くの人々は反乱へと追い詰められていったのである。

### タータンの禁止

のちの世代は、ハイランドの氏族<sup>クラン</sup>長たちがスチュアート家をイギリス王位に戻そうとした2度のジャコバイトの反乱(1715年と1745年)を、ロマンティックに描いてきた。しかしそれらは現実には、彼ら反逆者の視点からすれば、まさに大失敗だった。クラン制度の終焉を早めただけでなく、タータン自体の消滅を危うく招くところだったからだ。

強硬なイギリスにとってその解決策は、反逆者を生んだ文化システムを根絶やしにすることだった。なかでもタータンとハイランド・ドレスは、最重要ターゲットとなった。着用者のクランを特定する公認の制度がまだ生まれてもない時代に、タータンの着用は一世代にわたって禁止されてしまったことから、タータンは絶滅寸前にまで追い込まれたかにみえた。

### 復活

しかしながら、消滅の危機にあったタータンは、軍隊との絡みにより救出された。拡大を続ける大英帝国の国益を守るために、新たにハイランド連隊が必要となったイングランド政府は、その新兵募集の措置として、連隊

の兵士にはタータンの着用禁止を免除したのである。時を同じくして、ロマン主義運動がハイランドの人々に新たな光を当てた。徐々に彼らは、もはや国家の安全保障に対する脅威ではなく、謎めいた古代ケルト人を祖先にもつ、華麗で異国情緒を漂わせる人々であると認識されるようになっていった。

このイメージの転換の決定打となったのは、1822年のジョージ4世のエディンバラ公式訪問である。その行事はいわば、ハイランドのクランを主役に据えた輝かしく壮麗なショーであり、この画期的な試みが成功すると、影響は瞬く間に広がっていった。ハイランドの衣装の多くの要素は、たかだかこの影響力の大きな時代に生まれたものである。そしてハイランドのロマンティックなイメージを不滅のものにしたのが、この地を心から愛したヴィクトリア女王だった。この時代には、歴史家や熱意ある人々が、ハイランドの文化について可能な限り記録に残そうと努めた。

### 現代の発展

同様の二項対立は、20世紀のほとんどを通してみられた。ハイランドの古風でロマンティックなイメージは、観光客向けの陳腐な常套手段として使われ始め、タータンはまるでショートブレッド缶など、スコットランド土産のパッケージも同然になり果てる運命であるかにみえた。しかしその一方で、ほかの分野へと広がったタータンは、そ

▼ 伝統的なスコットランドの戦士の剣と盾。



▲ スコットランドに自分の城とタータンを所有するイクバル・シング。

の伝統に新たな生命を吹き込んだのである。1950年代にはモダン・タータンの制作が加速し始め、その新たなテーマは、記念タータンやコーポレート・タータンなど非常に広範囲におよんだ。海外のタータンもかなりの数にのぼり、その多くはカントリーダンスやハイランド・ゲームズなど、スコットランドの伝統的な活動への関心の広がりを反映していた。アメリカとカナダでは、タータン・デーを祝おうという機運が高まっている。さらにタータンは、服飾デザイナーの関心を引き続けており、有名人のイベントではハイランドの衣装は相変わらず大人気である。しかしだからといって、タータンは情緒を掻き立てるシンボルとしての力をまったく失っておらず、現在でもスコットランドを象徴する重要なイベントや国家行事では、決まって使用されている。

純粹主義者は、いくたびかのタータンの刷新をあまり心よく思わないかもしれないが、タータンは生活の一部であると同時にその伝統を絶えず発展させており、そういうものであるがゆえに、ある程度の変化は避けられないのは自明である。世界に広がるタータンの新たなデザインの可能性は、そのスコットランド的特徴を薄めるどころか、世界各地でスコットランド文化の強化と推進に役立っている。

[1] スコットランドのハイランド人の男性や軍人が着用する格子縞で縦ひだの膝丈の巻きスカート。

[2] “麗しのチャールズ王子”という意味。“若僧王”と称されたチャールズ・エドワード・ステュアートのこと。本書p.44に詳述。

# タータンの起源

---

スコットランドの民族衣装の物語は、  
ハイランドの波乱に満ちた歴史と深く関係している。  
どの一族もが誇りを抱いて身につける色鮮やかなタータンのへ愛は、  
ケルトの遺産とハイランドの氏族の  
独特な性質から生まれたのである。



## タータンの起源

タータンの起源はスコットランドのはるか昔にまでさかのぼるが、その言葉の意味は長い年月のなかで変化してきた。本来タータンとは、生地柄のことでなく、ハイランドの人々が身にまとっていたある種の生地や、血族といった概念をさすものだった。おそらくこの言葉は、<sup>リネン</sup>麻と<sup>ウール</sup>羊毛を使った目の粗い交織物を表す、フランス語のティルトラン(tiretaineあるいはtertainne)に由来する。

### 諸説と神話

フランス語由来説は万人に受け入れられているわけではないが、タータンの元来の目的についての手がかりは、史料から確かに得られる。古代ケルトの法体系を取めたシャーンハス・モール(大古法)によれば、<sup>ストライプ</sup>縞模様は、古代の衣服で明らかに階級の指標として使われていた。王の衣装には7本の、ドルイド<sup>[1]</sup>の衣装には6本の縞が入っており、最下層の農民は1本だけ縞を入れることができたという。縞の色にも意味があった。この象徴的な形態の衣服は、タータンの発展

▼ アントニヌスの防壁近くで見つかったローマ時代の彫刻の一部。古代ケルト様式の服装について、手がかりを与えてくれる。



初期に影響を与えたかもしれない。

こうしたまるで隙のないもっともらしい説のほかにも、もっと憶測にもとづいた説もある。ある学者は、この言葉は、中央アジアの好戦的な民族であるタートル族を表す Tartar という言葉が転訛したものだと主張した。また別の専門家は、この言葉を Tartan という名のアッシリアの將軍と結びつけた。彼はアシュドドという都の征服者として、聖書にほんのわずかに登場する(II King XVIII, 17 and Isaiah XX, 1)。どちらの説も、どうやらタータンとの関連性をうかがわせる根拠となっているのは、こうした遠く離れた東方地域の人々の衣服が、異国情緒や色彩に富むという点で、ハイランドのそれと似ているということにすぎない。

### 当時の手がかり

ケルト人にかんする最古の情報が得られるのは、彼らと敵対したローマ人からである。ローマ人は、ケルト人が織物や染色に長けており、色彩豊かな衣服をととても大切にしていた、とたびたび言及している。スコットランド南部にあるアントニヌスの防壁付近で発見された石の彫刻の破

### ケルトの伝統

一部の専門家は、タータンという言葉の由来はゲール語の tuar (色)と tan (地域)だと主張している。本来それぞれのタータンは、特定のクランではなく地域を表していたという説と符合するからだ。この説は非常に魅力的だが、文書の証拠による裏づけはほとんどない。むしろ、タータンについてゲール語の文書で最初期に使われた言葉は、決まって“まだらの”という意味の breacan だった。

片からは、ケルト人戦士(ピクト人あるいはカレドニア人<sup>[2]</sup>)が、軍装の一種であるサグムによく似たマントを着ていたことが見てとれる。これはのちに発達したブラッド<sup>[3]</sup>と同じく、肩でピンやブローチを使って留める。

スコット人は、アイルランドからレイネという衣服——おそらく麻で作られたサフロン染めのシャツまたはチュニックで、膝丈ほどの長さだった——を持ち込んだ。これはおそらく、“裸足王”マグヌス(在位 1093～1103年)の伝説に登場する衣装であり、知られているなかで最古のハイランド人の衣服にかんする描写である。この北欧伝説は、ノルウェー王マグヌス3世がどのようにしてスコットランドの西方諸島への遠征を指揮し、スコットランド王エドガー(在位 1097～1107年)にヘブリディーズ諸島に対する領有権を認めさせたかを描いたものだ。遠征は見事に成功し、マグヌスと家臣たちは現地式の衣装——“短いチュニックと上衣”——を採用することにした。このチュニックがキルトの原形である、と解釈する試みがなされてきた。このチュニックとはおそらくレイネのことだと思われるが、よくわかっていない“上衣”は、ブラッドとして知られる丈の長い毛織物の原形だったのではないだろうか。いずれにせよ、マグヌスは



この新たな衣装によって、“裸足王”という異名を得たのである。

このスタイルはその後あまり変化せず、歴史学者のジョン・メジャーは、4世紀以上を経た後のハイランド人の衣装について、「ひざ上からつま先まで足を覆うものはなく、上着代わりにのマントと、サフラン染めのシャツを着ている……」と、似たような言葉で表現している。



▲ クランの男たちは、折ってひだをつけたブラッドをベルトでまとめあげ、扱いやすい状態を維持していた。

### ブラッドの普及

16世紀頃にはブラッドは人々に受容されていたようであり、そのことを示す証拠が増えている。1582年にジョージ・ブキャナンは、一部のハイランド人が、部族の忠誠のためというよりも、カモフラージュ目的で、衣服の色を選んでいるさまを記している。「彼らは雑色の、とりわけ縞柄の服を好み、特に紫色と青色がお気に入りである。彼らの先祖は多色使いのブラッドを身にまとい、多くの人がまだその慣習を守っているが、今では大半の人が、日がな一日ヘザーの生い茂る荒野で寝そべっていても誰にも見つからないような、ヘザーの葉そつくりの濃褐色の服を着たがるのだ……」。ブキャナンは、衣類の乏しい環境にある彼らのタフさにも舌を巻いている。「……身体を覆うのではなく、ただこれら(ブラッド)を身体に巻きつけるだけで、彼らは野外の猛烈な嵐をもとませず、ときには雪の降るなか横になって眠ることもある……」。

タータンは当時、すでにお墨つきを得ていた。1538年の大蔵卿の記録から、ジェームズ5世が王室メンバーとして初めてハイランドの衣装を発注したことがわかっているのだ。その記録には、「丈の短いハイランド・コート用に、1エル(当時の尺度でおおよそ1.1メートル)あたり6ポンドの多色織りのヴェルヴェットを2と4分の1エルと、そのコートの裏地用に緑色のタフタを3と4分の1エルと……、ホー

▲ かつてハイランド人は、レイネというアイルランド発祥の麻のチュニックが変化した衣服を着ていた。

ズ<sup>[4]</sup>用にハイランドのタータンを3エル」と記載されていた。要するにこの国王は、多色織りの丈の短いジャケットと、タータンのトゥルーズ<sup>[5]</sup>を発注していたのである。

[1] 古代アイルランドのケルト社会で、キリスト教に改宗する前に信仰されていたドルイド教の祭司。当時最高の学者で、予言や魔術をおこない、裁判官や詩人を兼ねた。

[2] 古代ローマ人がフォース・クライド地域より北に住む人々をさすのに用いた名称。3世紀末以降、ピクト人と呼ばれるようになる。

[3] 日本語ではブレード、ブレイドとも表記される。丈の長い肩掛けのこと。本書P.16参照。

[4] 中世ヨーロッパの脚衣で、今日のタイツのようなもの。

[5] ホーズに似た脚衣で、主にハイランド人がはいたタータン柄のももひき型のズボン。



▲ ジョン・スピードが製作した1646年のスコットランドの地図に掲載されたハイランド人。貧しさを強調するため、ブラッドの生地が足りず肌が露出した姿で描かれている。



# タータン名鑑



# 代表的なクラン

本書はここからタータン名鑑となる。

まず初めに、スコットランドを代表するクランとそのタータンを取り上げる。

次に主な一族やクランのタータンについて扱い、

最後に近年、世界各地で出現してきた多種多様なタータンのなかから、

主なものを選びすぐって紹介する。

主要なクランの行動をみていくと、スコットランド史のさまざまな事象が鮮やかに浮かび上がる。

多くのタータンは、スチュアート王家や、誇り高き“島々の領主”であるマクドナルド家、

恐れを知らぬブルース家など、偉大な一族に敬意を表して作られてきたのである。



## ブルース(BRUCE)

クラン・ブルースは、強い愛国心を胸にイングランドと戦った14世紀の英雄、ロバート・ザ・ブルース(スコットランド王ロバート1世、在位1306～29年)の偉業と永遠に結びつけられている。ブルース家の血は、ロバートの娘マージョリーを通して、スチュアート王家へと受け継がれた。

ブルース家は、ウィリアム征服王<sup>[1]</sup>と行動をともにし、イングランド北部のヨークシャーに土地を下賜されたノルマン人騎士、ロバート・ドゥ・ブルース(de Bruis)の子孫である。その息子のひとりで同名のロバート・ドゥ・ブルースはデイヴィッド王子<sup>[2]</sup>と親密になり、王子がスコットランド王デイヴィッド1世(在位1124～53年)として即位すると、スコットランド南西部のアナンデルに領地を賜った。しかしロバートの忠誠心は依然としてイングランドの方を向いており、そのためデイヴィッド1世が、イングランド王位を要求する姪のマティルダを支持してイングランドに侵攻すると<sup>[3]</sup>、ロバートは領主の地位を息子のロバートに譲り、イングランド軍に加勢した。1138年にスコットランド軍は敗れ、父ロバートは、スコットランド側について戦った息子を捕虜にした。

### スコットランド王位の要求

その後、この第2代アナンデル

前ページ：アイラ海峡

▼ このチーフのタータンは、6種類あるブルース家のクラン・タータンのなかで最古のものである。ブルース卿<sup>[4]</sup>によれば、1571年には存在していた可能性がある。



▲ 国民的英雄のロバート1世。この19世紀の版画では、王笏のような斧を持つ姿で描かれている。

領主ロバートは釈放され、スコットランドへの帰還を許された。ときが流れ、彼の孫にあたる同名のロバートは、スコットランド王ウィリアム1世(在位1165～1214年)の姪イザベルと結婚した。1290年には彼らの息子でまともや同名のロバートがスコットランドの王位継承権を主張したが、仲裁に招かれたイングランドのエドワード1世は、多くの王位請求者のなかからジョン・ベイリアル(在位1292～96年)を支持した。

ベイリアルがイングランドに対抗してフランス国王と同盟<sup>[5]</sup>を締結すると、エドワード1世はスコットランドに侵攻し、ダンバーでスコットランド軍を破った。ベイリアルは王位を捨て、スコットランドの王位継承問題は、ブ

▼ クラン・タータンを少し変化させた、〈ブルース・ハンティング〉タータン。



ルース家と、ジョン王支持派のカミン家の中に残された。

1306年2月、ロバート・ザ・ブルースは対立するジョン・カミンと、ダンフリースにあるフランシスコ会の教会で直接顔を合わせるようになった。しかしふたりは口論となり、ロバートは祭壇の前でカミンを刺殺、ロバートはこの行為によりローマ教皇から破門されたが、王位は彼のものとなった。

### ロバート・ザ・ブルースの功績と遺産

ロバート・ザ・ブルースは1306年、スクーンでスコットランド王ロバート1世として即位すると、すぐさま国内の反対勢力を抑えるために軍事行動に着手した。その成功により、彼の武勇と戦術に対する名声は高まった。カミン家とマクドゥーガル家を撃破し、スコットランドにあるイングランド軍の砦をひとつひとつつ手中に収めていったのである。1314年にはバノックバーンで、エドワード2世率いる強力なイングランド軍に勝利したが、イングランドの支配から自由を勝ち取ろうとする彼の奮闘はその後も続き、ついに1328年、エディンバラ協定の締結によって、スコットランドの独立が認められた。

ロバート・ザ・ブルースは、盟友の“グッド”サー・ジェイムズ・ダグラスから、防腐処理を施した自分の心臓を聖地に運ぶ約束を取りつけた後、

▼ キンナードの分家が保有していた〈ブルース・オブ・キンナード〉。1950年頃に正式に認可された。





▲ 親戚であるデイヴィッド 2 世からこの一族に賜った土地に、14 世紀に建てられたクラックマナン・タワー。

1329 年 6 月 7 日に 55 歳でカードロスにて死去した。遺体はダンファームリン修道院に埋葬された。

ロバート 1 世の跡を継いだ息子のデイヴィッド 2 世(在位 1329～71 年)は、世継ぎを残さずに亡くなった。そのため王位は、ロバートの娘であるマージョリーの長男ロバート・スチュアートへと受け渡された。彼は 1371 年から 1390 年までロバート 2 世として国を治め、スコットランドのスチュアート王朝を開いた。

時代は下り、1603 年にイングランドのエリザベス 1 世が亡くなると、サー・エドワード・ブルースは、イングランド・アイルランド国王ジェイムズ 1 世として即位するジェイムズ 6 世(在位 1567～1625 年)に随行し、南に赴いた。サー・エドワードは記録長官に任命され、1633 年には彼の息子トマスが、初代エルギン伯爵に叙せられた。

### クラックマナンのブルース家

ロバート・ザ・ブルースのいとこのひとは、クラックマナンのブルース家の祖先である。16 世紀に、スターリングシャーのエアース出身のこの家の分家の子孫が、カルヴァン派の牧師

となった。この人物(またもやロバート・ブルースという)は、スコットランド教会を創始したジョン・ノックスの後を継ぎ、1572 年にエディンバラのセントジャイルズ大聖堂の牧師となったのである。彼のいとこにあたるジェイムズ 6 世は定期的にその説教に耳を傾け、1590 年にデンマーク人の新妻アン<sup>[6]</sup>がホリールードで戴冠する際には、彼女の聖別を彼を指名した。しかしのちにこのいとこたちは仲たがひし、ロバートはインヴァネスに追放された。

ロバートの曾孫にあたるジェイムズ・ブルースは、アフリカ大陸で青ナイル川の水源を突き止めた探検家である。1790 年に 5 巻におよぶ著書『ナイル探検(Discover the Sources of the Nile)』を刊行したが、このアビシニア(エチオピアの旧称)の紀行記は想像を超える驚くべき内容だったため、詩人で辞書編集者のジョンソン博士を始め、当時の人々の多くは、作り話だとして相手にしなかった。

### エルギン・マーブルズ

クラックマナンのブルース家出身の有名な子孫には、ほかにも軍人であり外交官だった第 7 代エルギン伯爵トマス・ブルースがいる。彼は 19 世紀初頭、アテネのパルテノン神殿から古代ギリシャの大理石のフリーズ(装飾

的な彫刻を施した壁面部分)をロンドンへ運び出した。大理石の彫刻をギリシャから持ち出すことに対して非難の声があがったが、伯爵は、破壊や劣化からそれらを守っているのだと主張した。1816 年に大英博物館が買い取ったその彫刻群は、現在、エルギン・マーブルズと呼ばれている。

トマスの息子で第 8 代エルギン伯爵のジェイムズは、ジャマイカ総督、カナダ総督、インド総督を歴任した<sup>[7]</sup>。ジェイムズの弟のフレデリック・ウィリアム・アドルフ・ブルースは、在北京イギリス特命使節および全権公使を務め、アメリカ南北戦争の終結時にはイギリス特命使節および全権公使としてワシントン DC に居合わせた。

[1] イングランド王ウィリアム 1 世(在位 1066～87 年)。1066 年のノルマン・コンクエストでイングランドを征服した。

[2] イングランド王ヘンリー 1 世のもとで育ち、即位前にイングランドの有力貴族のひとりになっていた。

[3] ヘンリー 1 世の死後、ヘンリーの甥ステューヴンと娘マティルダの間に王位継承争いが発生し、デイヴィッドは姪にあたるマティルダを支持、王位を継いだステューヴンと敵対することとなった。

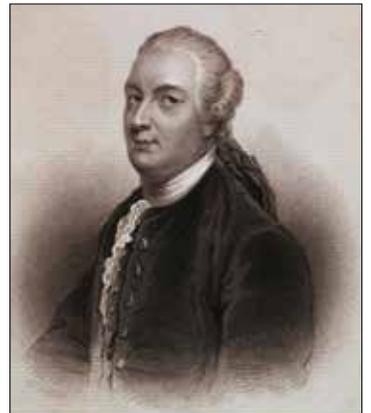
[4] タータン登記所の解説によると、現チーフである第 11 代エルギン伯爵アンドルー・ブルースのことで推察される。

[5] 1295 年の“古き同盟”のこと。

[6] デンマーク＝ノルウェー王フレゼリク 2 世の娘。

[7] 1858 年には来日して、江戸幕府と日英修好通商条約を締結している。

▼ ジェイムズ・ブルースは天文学者であり、言語学者であり、また高名な探検家でもあった。



# 主な一族・クラン

---

比較的規模の小さいクランの多くも、  
スコットランドという国の発展に大きく貢献した。  
彼らは現在も一族のクラン・タータンを誇らしげに身にまとい、  
その高名な祖先の榮譽をたたえている。



## アバクロンビー～アーバスノット

〈アバクロンビー〉タータンは、1831年にジェイムズ・ローガンが『スコティッシュ・ゲール』に掲載した55種類のデザインのひとつである。〈アンダーソン〉タータンには、その高雅な柄をわずかに変化させた“変種”がたくさん残っている。

### アバクロンビー (ABERCROMBIE)

この姓は、ファイフ<sup>[1]</sup>のアバクロンビー小教区に由来する。一族の先祖ウィリアム・ドゥ・アバクロンビー (Abercromby) は、1296年にイングランド王のエドワード1世に忠誠を誓った<sup>[2]</sup>。17世紀にウィリアムの血筋が途絶えると、チーフ職はハンフシャーにあるバーケンボグのアバクロンビー家に移った。

アレクサンダー・アバクロンビー・オブ・バーケンボグは1637年にノヴァスコシア准男爵となった。彼の親戚で18世紀の著名な軍人サー・ラルフ・アバクロンビーは、七年戦争とフランス革命戦争で戦い、1801年にはエジプトで、ロイヤル・ハイランダーズを率いてナポレオン・ボナパルト軍と戦い、致命傷を負った。彼の未亡人はアバクロンビー・オブ・アプキール・アンド・タリバディ女男爵を賜った。彼の弟のロバートはインドでイギリス軍を指揮し、ボンベイ総督を務めた。スコットランドへ帰国すると、1801年にエディンバラ城の管理長官に任命された。

前ページ：ベン・ロイヤル<sup>[3]</sup>

▼ バノックパーンのウィルソン社は、1819年のリストに〈アバクロンビー〉タータンを掲載した。



### アグニュー (AGNEW)

アグニュー家は、1066年にイングランドに渡来し、アイルランドを経由して12世紀にスコットランドのローランド地方にやってきたノルマン人騎士の子孫といわれ、その姓はフランスのアニョー(Agneaux)男爵領に由来する。1190年にウィリアム・ドゥ・アグノー(Aigneau)は、ジェドバラ修道院に対するラヌルフ・ドゥ・ソウリス<sup>[4]</sup>の特許状に、証人として署名した。一方、アグニュー家の祖先は、アントリム<sup>[5]</sup>で権勢を誇ったオニール家<sup>バーード</sup>に吟唱詩人として仕えた、アルスターのオグニム(O'Gnimh)家だったという説もある。もしこれが正しければ、アグニュー家は12世紀の“島々の王”サマーレッドを通して、スコットランドのマクドナルド家ならびにマクドネル家と、共通の祖先をもつことになる。

このクランで最初に名を揚げたのは、1363年からギャロウエイの地方長官を世襲したロツホノーのアグニュー家だった。アンドルー・アグニューは1426年にロツホノーの治安官に、また1451年には世襲職であるウィグタウン<sup>[6]</sup>の地方長官に任じられた。ウィグタウンの第7代地方長官だったサー・パトリック・アグニューは、1629年にノヴァスコシア准男爵となった。1745年のジャコバイトの反乱では、第5代准男爵のサー・アンドルー・アグニューがハノーヴァー側に付いて戦い、270人の守備隊で、それよりはるかに多くの兵からブレア城をおよそ2週間にわたって守り抜いた<sup>[7]</sup>。アグニュー家の先祖が所有し、

▼ アグニュー家はアイルランドに起源があるかもしれない。1600年以降、多くの人がアルスターで暮らした。



大部分が16世紀に建てられたロツホノー城は現在も湖畔に行んでいる。

### アリソン (ALLISON)

アリソン家は、クラン・マクドナルドあるいはクラン・マカリスターから枝分かれた家で、姓は“アリス(Alice)の息子”、“エリス(Ellis)の息子”、あるいは“アリストアー(Alister)の息子”に由来するとみられる。文書では、AllinsonやEllisonと綴られることもある。スコットランドでこの姓が最初に現れたのは、13世紀半ば——アリソン(Alison)という名が、女性のファースト・ネームとして使われるようになる100年以上前——のラガン湖地域である。1296年には、パトリック・アリソン(Alisone)・オブ・ベリックがイングランド王エドワード1世に対する忠誠の誓いに署名した。複数の説によれば、このクランの祖先はアレクサンダー・マカリスター(MacAlister)・オブ・ロウブ(アーガイルシャー)の息子たちで、彼らはロバート・ザ・ブルース(在位1306～29年)の時代に、アリソンという姓でラナークシャーに根をおろしたという。このクランの人物で記録に残っているのは、1490年のブレチンの法的文書の連署人となったピーター・アレソン(Alesoun)や、1688年にレンフルーの役人だったジェイムズ・アラソン(Allasone)などである。

### アンダーソン (ANDERSON)

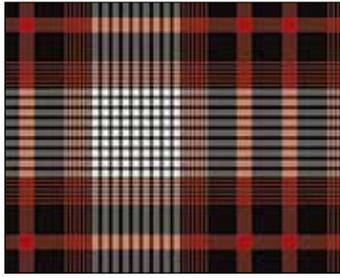
“アンドルー(Andrew)の息子”が英語化された姓で、アンドルーとはス

▼ アリソン家のモットーは、「Vincit veritas (“真実は勝つ”)という意味」である。





▲ 優美な(アンダーソン)タータン。少なくとも19世紀前半のもの。



▲ (アンガス)タータンは、アンガス地域にゆかりのある人であれば誰でも着ることができる。



▲ 1962年に登録された(アーバスノット)。(ブラック・ウォッチ)をベースにしている。

コットランドの守護聖人、聖アンドルーをさす。“アンダーソン”はローランドで使用されたが、ハイランドでは“マクアンドルー(MacAndrew)”の方が一般的である。マクアンドルー家はクラン・チャットンの一員だった。

アンダーソン家は1540年からドウヒルに住みつき、その親戚はパンフシャーやストラスドンにもいた。1670年に弓の名手だったイアン・ベグ・マクアンドルー(MacAindrea)は、アックルアックラック(または、アックラップラフ)のマクドネル家が率いる家畜泥棒の一味をことごとく矢で討ち取った。歴史家・古物研究家のジェームズ・アンダーソン(1662年生～1728年没)は、スコットランドの印璽や、歴史的に重要な文書の収集をおこなった。グラスゴー大学の東洋言語学教授ならびに自然科学教授だったジョン・アンダーソン(1726年生～1796年没)は、グラスゴーに初めて避雷針を立てた人物である。エリザベス・ギャレット・アンダーソン(1836年生～1917年没)は1865年にイギリス初の女性医師となり、ロンドン・スクール・オブ・メディスンの設立にかかわった。1908年にはイギリス初の女性市長に選出された。

### アンガス (ANGUS)

この一族のタータンは、スコットランド東部のアンガスという地域に關係している。この地域は9世紀にスコット人——アイルランドからスコットランド西部に移住し、ダルリアダ王国を建設したゲール語を話す人々——に支配されていた。クラン・アンガスの人々は古来より、祖先はダルリアダ

の建国者のひとりであるオーンガス(Oenghus)だと主張している。記録に残る最初のアンガス伯爵はギルクリストといい、一説によれば、彼はウィリアム1世(在位1165～1214年)の姉(あるいは妹)と結婚したが、姦通を理由に彼女を殺めさせたという。彼は国王から追放されたが、のちに許され、伯爵の身分も回復した。ギルクリストの息子で第2代伯爵のギリブリードは、1138年のスタンダードの戦いでデイヴィッド1世とともに戦った。アンガス伯爵の地位はのちにスチュアート家に移り、その後、ダグラス家に与えられた。

### アーバスノット (ARBUTHNOTT)

アーバスノットという姓は、この一族が暮らしたキンカーディンシャーの地名に由来する。1175年頃、ウィリアム1世はその土地をオズバート・オリファードに下賜したが、彼は第3回十字軍(1189～92年)で戦死した。彼の弟で相続人のウォルターはその土地をヒュー・ドウ・スウィントンに与え、その息子のダンカンがアーバスノットを姓に採用した。地元には、ダンカンの孫息子ヒュー・ル・ブロンドが、女王の命を救うためドラゴンを仕留めたという伝説が残っており、それはサー・ウォルター・スコットのバラッドの着想源となった。1420年にヒュー・アーバスノットが着手した城の建設は、孫のロバートによって完成

した。大内乱ではサー・ロバート・アーバスノットがカヴェンター側に付いたため、一族の地所は1645年に王党派軍に荒らされた。アーバスノットのチーフたちは長い年月をかけて、その15世紀の城をジョージアン様式の邸宅に変え、それは現在、クランの先祖の地に美しい彩りを添えている。

- [1] スコットランド東部のテイ湾とフォース湾の間に位置する地域。
- [2] ラグマン誓約状への署名のこと。本書p.32参照。
- [3] ハイランド北部サザランドに位置する標高764メートルの山。
- [4] 国王の献酌官を務めた人物とみられる。
- [5] 北アイルランド北東部の地域。
- [6] スコットランド南西部の地域。
- [7] プレア城はアソル公爵マリー一家の本拠地。マリー家は、ジャコバイトの反乱の際、一族内で敵味方に分かれた。この包囲攻撃は1946年3月17日～4月2日に起きた。

▼ ティー川とテイ川に挟まれたスコットランド東海岸のアンガス地域は、きわめて自立心の強い誇り高き土地柄だった。

